

# 遠い道のりだからこそ

上 廣 榮 治

梅雨の季節には心が内に向かうのでしょうか。日頃の悩みを聞くことが多いように思われます。

「営々として日々実践に励んでいるのに、なかなか新たな境地へ歩を進めることができない」、あるいはまた、「実践の実が上がつているようには思われません」。しばしば、そんな悩みを打ち明けられることがございます。そんな時、私は次のようにお答えすることが、ここ数年多くなりました。「それはそれでしよう。努めれば努めるほど、自分の至らなさ、道の遠さはわかってくるものですから」と。

囲碁名誉棋聖の藤沢秀行さんの『碁打秀行』という本に、面白い挿話が載っています。将棋の故芹沢博文九段と藤沢さんが「碁と将棋の神様が百として、我々はどれだけ知っているか」、それを数字で表わしてみようということになったそうです。たがいに紙に書いて見せ合ったところ、藤沢さんは「六」で、芹沢さんが「四か五」でした。ともに天才の名をほしのままにした名棋士です。それが、その道の

真髓については百のうち四から六の道程にしか達していないと、本気で感じていたのです。

どんな芸事でも学問でもそうですが、習いはじめた頃には、自分はこの方面に才能があるに違いないと感じることがしばしばあります。絵でも書でも写真でも、音楽や勉強でもそうです。習い事の真髓から遠ければ遠いほど、自分の能力が素晴らしいものだと誤解することができのです。本物とはどういふものであるかを知りませんから、自分の能力や作品を素晴らしいと思えるのです。

最初の作品を仕上げた時のあの高揚感こうようかん。さっそく作品を玄関に飾ったりいたします。しかし、制作を続けて数か月、最初の作品は玄関から自室へ移され、やがて物置きに仕舞われることになるのです。その道がおぼろげながらもわかってくると、その作品が評価に耐えるものではないと知るのです。

我が会においても、よく似た事例があることに、皆さんは思い当たられると思います。実践をはじめるとすぐに、驚くほどの効果があった、実践の実が上がったといつて、誰もが興奮いたします。これは素晴らしい、是非ぜひどなたかにお伝えしたいという気持ちになるものです。

どうやら人は、真・善・美にかかわる何事かをはじめた時に、そうした興奮や感動を味わうことができるのだと思います。なぜなら、私たちはみな、真・善・美の尊ぶべきことを、自然の摂理によって生まれながらに体内にセットされているからだと思います。そのため、はじめて真・善・美にかかわる何事かに触れた時、身内みうちにセットされた真・善・美への憧れあこがれが顕在化けんざいかして、興奮もし感動もするのです。もつともつと、真を善を美を究めたいと、誰もが希望するのです。

ところが、そうした希望にもかかわらず、多くの人が初心を忘れることになってしまいます。

一つには、自分が希望した真・善・美から拒絶されたと感じた場合です。例えば、中学校に入つてはじめて英語を習う。はじめは面白いと思っていたのに成績が悪かった。あるいは、自信があつた作品を

誰かに酷評された。あるいはまた、善いことをしたと思っていたのに誤解された。そんな場合です。

要するに、ちよつとした蹉跌さくてつによって、最初の感動を忘れ、自ら先を求めたことを放棄してしまうのです。多分、いちばん多いのは、こうしたケースではないでしょうか。

次いで多いのは、慢心です。道半ばにして「これでよし」としてしまふ場合です。慢心とは、ただ真髓を見る目がまだできていないということにすぎません。

『論語』のあの有名な章句は、真・善・美を求めた道がいかに遠いかをはっきりと教えてくれます。

孔子は「十有五にして学に志す」、つまり学問をしようと決心します。この時すでに、孔子は基礎教育の段階はマスターしていたと思われまふから、その上で、世の真実の姿、あるべき人の姿、自然の摂理、すなわち真・善・美の真髓を学ぼうと決心したのでした。これが十五歳の時でした。

それから十五年の研鑽けんさんを経て「三十にして立つ」、つまり、真髓の影が見えてきた。しかし、それはほんやりとした予感のようなものだったと思います。なぜなら、さらに十年ののちに、ようやく「四十にして惑まどわず」と言っているからです。研鑽実践二十五年で、自分の向かう方向に確信がもてたのです。この段階が、囲碁名誉棋聖の藤沢さんが、囲碁の神様を百として自分はいくつか、と振り返った時点にあたるでしょう。真髓は見えた。しかし同時に、自分はやつと見えてきた真髓からはるかに遠いところにいるということも見えたのです。

孔子の行動が真・善・美の真髓から外れることがなくなつたのは、不惑の歳からさらに三十年の研鑽実践を重ねたあとのことです。はじめて学に志した時の高揚から、実に五十五年を経ていたのです。

私たちは生まれながらに、真・善・美を尊ぶ感性と、それを希求する資質を持っています。もし、誰もがその資質を開花させ、自然の摂理のままに真・善・美を求めて生きることができれば、世の悪

しきことは全て消滅してしまうに違いありません。

しかし、そうならないのが現実です。私たちはごく早い未熟な時期に、真・善・美にかかわることの喜びを体験します。しかし未熟な分、ごくさいいなことで簡単に挫折してしまうからです。

そこで、真・善・美を求めることは、いつでもリセットが可能だということを肝に銘じていただきたいと、私は思います。いつでも、またいくつになっても、やり直しはきくのです。初心の頃の、あの喜ばしい思いを、再び経験することができるのです。かつての挫折に捉われてはなりません。何度でも、真・善・美とともにあることを希求することが、常に幸福へのいちばんの近道なのです。

真髓を求めて、実践の日々を送りはじめたなら、ただひたすら心掛けるべきことは「立ち止まるな」ということです。真髓の影が見えるまで、嘗々と精進しやうじんに努めよということです。

かく努力を続けた結果、真髓の影がほの見えてきた時に、もう一つの壁が現われます。真髓と我が身の間にある、無限とも思われるほどの距離であります。しかし、と私は思うのです。それは偉大なる喜びでもあるのではないかと。

すぐ近くの低い峰には、登ったあとの失楽感しらくかんがあつても、はるかな高い峰には大きな希望があります。この道を歩む私たちは、永遠に真・善・美に向かって歩み続ける者である。すなわち、常に真と善と美とともにある者であるという、この世の至上の幸福を生きることにもなるのです。

冒頭ぼうとうの如く、道の遠さを嘆かれる方。皆さんはすでに真髓の影を見ているのです。それを知り得たが故に、道の遠さを実感できているのです。とすれば、何を嘆くことがありましょう。はるかなる倫理の真髓へ通ずる求道くどうに身を呈していることの、なんと喜ばしいことか。それを感謝し、喜び、楽しめばよいのではないのでしょうか。